



# 憩い



新保 章

## コンテンツ

---

### (コンテンツ)

- 南風の大地
- 春の日に
- 春の日に
- 街で
- 草原のひとつとき
- 沖合へ
- 憩い
- 川縁を歩いて
- 雨上がり
- 穏やかな思い
- 夕映えに
- 眠りに落ちる前に
- 豊潤な夜
- 夢の中の人に
- 朝に
- 春の歌
- 毎日の音色に
- 写真に
- 夏の避暑地で
- 港の公園
- 晩夏の公園
- 冬の思い
- 桜色の小舟
- 潮風に歩いた日
- めぐり逢う日に

## 南風の大地

ほら 肌にも柔らかな陽射しに  
誘われて吹く 南風が真っ先に  
優しく笑うあなたを見つけて  
いたずらげに髪を遊ぶから  
悪ふざけの子犬と 戯れるように  
あなたは頭を 手で押さえたまま  
楽しげに僕に 助けをもとめる

今日 あなたに 一番に吹いた南風  
誰よりもきっと あなたに春を告げたくて  
運んできたのは 大地を染める春の色  
たくさんの生命の息吹 川を高ぶらせる鼓動  
野を覆う花の香りや 銀色に焦げた陽射し  
僕があなたに届けたい 那由多もの優しい調べを  
一息の流れにのせて あなたのもとへと

(川原には タンポポが笑うように  
それはきっと あなたの楽しさにつられて  
幾つもの甘い 花の香りは  
春が調合した あなたに似合う香水)

こんな 穏やかな風が  
いつまでも あなたの周りには吹いて  
あなたをすべての悲しいことから  
遠ざけてくれればいいと  
ありえないことを考える僕の  
長いコートも風にくくらみ  
明日からはもう いらないかも知れない

とけだす 春の小川の  
飽きることはない つむぎ歌のように  
僕の心もまた 歌い出そうとしている  
そばにいるあなたが 僕には春そのものだから

あなたが笑ってくれるたびに  
僕の心には 南風が吹いて  
萌黄色の思いがたくさん 芽吹こうとしているのだと  
意味深い 光りと風との会話に  
また豊かに 深み行けるのだと  
暖かな予感が大地一杯 あふれているんだ・・・・・・・・

## 春の日に

並木道に若葉が 繁るよりも少し早く  
春は通りを歩き始めて  
微笑むあなたの肩ごしから  
心地よい風を 僕に吹きつけて遊んだ

忙しい信号さえ 時々のおくびで遅れ気味の  
冬の陰しさ 人の顔から抜けた  
春の街いろどる花の名前  
あなたは指さし 教えてくれた  
暖かな 萌黄の陽射しを肌に  
その衣擦れさえも 聞こえてくる  
ゆっくりとした 歩調で

軽やかな蝶のように あなたに呼ばれて  
舞い降りてくる 花の名前は魔法のように  
僕の瞳の花びらの色 一枚一枚を解き放ち  
世界はまるで 明るく弾けるように感じられた

寝ぼけまなこ 春風にからかわれて  
どこか恥かしげに 顔を揺らす  
野に一杯の スミレの花のように  
音もなく素直に開く心は むせかえる薫りのかわりに  
溢れ出す言葉を 語り出していた  
歩き疲れて休む 木陰のベンチ  
春のように笑う楽しげな あなたの方へと

どこか 快い二重奏のように  
終わることのない僕らの調べは  
風が口ふさぐ 小さな休符と  
小鳥たちの 高い四分音符とを伴った  
青空の下の 自由な小さな楽団のようだった

芽吹いたばかりの 小枝の網目  
透ける陽光 キラキラと  
あなたの瞳には 明るく踊って  
そのたびに僕は  
まぶしく言葉を奪われたまま  
悪戯に目を細めたりを するばかりで

### 春の日に

ごらん 窓から零れ落ちる  
春の陽射しの明るさは  
この部屋には 収まりきらないから  
そのまぶしさに 追い出されて  
あなたと散歩する河原に 夢見心地に咲く  
すみれの優しい気分を そのままに  
瞳から取り出して 春の息吹にかえそう

あなたと二人でいることの 僕らの穏やかな呼吸  
太陽の下の会話は どんなにか楽しげに  
きらめく小川の上を遊ぶだろう  
さざなみ奏でる 銀色の音色よりも華やかに  
白い小鳥の影よりも はるかな高みに自由に

つながれた僕らの 手を触る南風は  
もう何人と握手をかわしてきたのか  
汗で湿ってしっとりと濡れ  
疲れ知らない 小犬の舌のように  
軽く息を はずませたままで

河原いっぱい 小鬼の角のように  
いばって芽吹く 泥をかぶった土筆には  
空の青さと 真っ白な雲は遠く  
けれど届くことができるものとして  
夢見ながら 伸びてゆくのだろう  
空を駆け上がる ひばりの高い飛翔のように  
穏やかな希望の 止まらない速さ  
急速に緑の髭を生やす 春の耕す楽しい大地に

花に止まって ゆっくりと  
陽射し打ち返す 蝶の羽根のように  
見知らぬ大地へと 心躍らせ風に舞う  
早熟なタンポポの 綿毛のように  
まるで穏やかなだけの僕らを  
春はその体の一部と 勘違いをして  
暖かな陽射しに 僕らの歩みを包み込む

僕らが歩調をあわせるたびに  
春風は箒をあやつり  
小さな花がいっせいに 何度でもおじぎをする  
蜜蜂の羽音も新鮮な 薫り高い野の波間に

街で

歩き疲れて あなたと二人  
こうして座って 目を合わせ微笑む  
ささいな仕草からも読みとれる  
僕らの間には 黙っていても  
通じあえる言葉があって  
それがこうまでに 二人を結びつけている

茶色の一輪差しが 一片の新鮮な花を咲かせた  
僕らの占める 白いテーブル以外は  
壊れたラジオのような 話しやまない言葉  
山のように卓上に 積み上がっていくけれど  
僕はあなたと そんな言葉で  
結ばれたものには なりたくはないんだ  
(そうして 積みきれない会話は  
足元にこぼれ 忘れられたまま  
騒がしい独り言に 爆せている)

両手に隠す 温かなコーヒーカップ  
その立ちこめる 香りの向こうから  
胸の奥に一つ一つと 素直に届く言葉が  
ミルクのように 甘く渦まき  
僕の心に 広がっていくから  
あなたとの楽しい会話の そんな穏やかさ  
いつまでも感じていたいと 僕は思うんだ

たとえばあなたの 言葉じりに瞳をのぞきこむ  
そんなとき僕には あなたが一番よくわかるんだ  
優しい瞳に映し出される あなたの心のふるえに  
あわせるようにふるえる 僕の胸には  
愛しい思いが 素直に溢れだすから

時折見せる 寂しげな仕草には  
誘われるように あなたの背を押す  
そんな二人だけの言葉を 僕は大切に思うんだ

どんな人込みにあっても  
伝えらえる 二人だけの言葉に  
口に出せば嘘になって 届かない  
この世でたった一つの  
狂おしい 僕の魂の調べ  
あなたは胸に 感じとってくれ

## 草原のひとつとき

しっとり　と　滋味を含んだ大気から  
しぼり集めたばかりの　新鮮な露に顔を洗い  
目覚めたての蕾　いっせいに開いて朝を告げる  
ラッパのような黄色の　花の群れから

伸び上がるあなたの　白い肌には  
山影の間から　顔を覗かせたばかりの  
浅い夏の光りが　どこかおずおずと  
優しい触手で　触れている

動き始めた草原の風は　朝日とあなたの髪とを遊び  
まるで金色の糸を　大気に紡ぎ出すよう  
働き始めの　ゆっくりとした糸車を真似て

山あいにはまだ　昨日のあわただしさ残す街が  
重たい夢に疲れたまま　肩を寄せ合い眠り  
一番早起きの犬さえも　起きあがる気配さえなく

草原をゆく風だけが　僕の心に音を立てて  
なだらかな山肌を　そのうるんだ舌にあてていた  
草原の朝のごちそうを　全部たいらげようとするかのような

僕は胸一杯に　朝の風をはらんで膨らんだまま  
視線の先には　あなたを追って  
遠くない所の花に遊び　時折は僕の瞳のぞく  
あなたはどこか　無邪気な表情で

僕はこぼれ落ちる陽の光りを　白い花吹雪にかえて  
その姿に　降らせたかった  
天使たちが戯れに　天の野原から摘んだ  
籠一杯の光りの花束を　静かに降り注ぐように



空の深みから 沸き上がる真綿の雲は  
手につかめそうな高さを 千切れ千切れに泳ぎ  
もうすぐ空を占める太陽に その身を輝かせようと

朝もやに胸一杯が しっとり濡れたままの  
僕は 何か発する言葉もなく  
ただまつげをさわる 朝日と風とに目を細めて  
愛しいあなたを 見ているだけで

沖合へ

漕ぎ出したのは 北極星が空にまたたく  
静かに凧いだ海だった  
夜 海原は力ある生き物のように  
小さな頭もたげて 運んでいく  
オールのない僕らの 二人乗りの舟を  
暗い闇に満たされたままの 遠い沖合の方へ

銀色の月影が 揺れる水面の鍵盤を  
あきることなく叩く ノクターンのしじま  
時折は振り返る 海岸線は  
かすかに またたく街の明かりを送り  
灯台はたむけに 光りの花束を投げてる

昨日まで僕らを 懐に抱いていた  
あの懐かしい明かりさえも 届かない  
僕らは 遠くへ向かうのだと  
語ろうとする 僕の唇をそっとふさぎ

深い色合いを帯びて あなたの瞳は  
語りかけてくる  
空を乱れる 短い命の星を宿し  
舌の上に費やされて尽きる いく千もの  
言葉以上の 言葉で

行くあては 夜風さえも知らない  
繰り返し船の先砕ける 波の音を聞きながら  
その波間にかいま見る 不安と希望との二つ  
僕らもまた胸に宿して

高まりゆく気持ちに 差し出す腕には  
あなたの 小さな頭を抱いて  
長い髪に 隠れた耳元には囁きを

(明日は南へ  
暖かい 椰子の葉が揺れる  
白い砂浜へと  
たよとう船を 届かせよう)

まつげにさわる朝日が  
あなたの瞳を 綺麗に目覚めさせて と

憩い

フラスコの底によどむ 透明な  
温もりのような 春の日曜の陽射しが  
午後の穏やかさに その身をゆだねるころ  
散歩帰りに あなたと歩いた公園は  
若葉の柔らかな緑に うっすらと色づいて  
踏みしめる大地の色合も どこか明るい感触で

僕らを 待ちわびていた風に  
誘われてゆっくりと 腰下ろすベンチ  
つないだ手のひらには  
あなたの温もりを 感じたままで

青空に水を蒔く 噴水のじょうろ  
水しぶきの雨に 虹の渡る池の水面  
僕は目を細め 眺めていた

いつしか 太陽の精緻な筆使いが  
休みなく描く 快い点描の絵画は  
パズルのように 頭を軽く疲れさせ

重くなるまぶたの裏 桜の花びらで一杯になる  
そんなまどろみに とけ入るように  
身をゆだねるまでには すぐのことだった

高原の 綿菅に落ちた朝陽よりも軽く  
吹き集う風よりも 透明に澄んだ僕の胸は  
雲一筋もない 青空の底のように  
いつもは物憂く離れない 街の騒音も  
夢よりも淡く 色をなくした  
遠い ブリキの楽曲だった・・・・・・・・

子供の近くで戯れる 高い声に  
息を吸い込むように 目を覚ましたとき  
傍らには その瞬間を知っていた  
あなたの笑顔が 静かにあって

安心した子供のように  
あなたの肩にもたれて見る  
まどろみの続き  
優しさがとけだす世界に

白い航路を描き  
水面をゆっくりと漂う  
優雅な水鳥の泳ぎを  
僕は 追いかけていた

## 川縁を歩いて

春が堂々で行進する 広い川縁を  
軽い足どりであなたと歩く 暖かな日曜日  
風の柔らかな手に触れてみたくて  
土手にはいっせいに 顔を出す野の花

狭い道 すれちがう人の白い肌にも  
うっすらと汗が 浮かぶ程の陽気に  
久しぶりに 歓声の上がる野球場  
みるみるうちに ユニフォームは泥に汚れて

僕らは 言葉の多くを語らずに  
ただ体一杯 春を吸い込むだけで  
火照る手足に 冷をとるため  
近づいてゆく 川のほとりには  
白い水鳥の 青い水に遊ぶ影

乾いた指先 そっと 川の瀬に濡らしてみると  
冬の冷たさを川下へ 押しやってゆく  
流れには小さく 速い魚影  
きっとこの春に 生まれたばかりの  
少しぎこちない 泳ぎで

つくしの背丈ほどに 身をかがめて  
すみれの花に触れる あなたの小さな肩越し  
僕が一息に吹いて飛ばす タンポポの種は  
その瞬間を待っていた風に 巻き上げられて高く

その軽やかに昇ってゆく  
楽しげな視点から 見上げた空の色には  
春を満腹にたいらげて 穏やかなばかりの  
いくつもの雲 新緑にけぶる梢に  
かかりそうな低さを ゆっくりと泳いで

あの上で休めたのなら きっと  
いつまでも静かな温もりに 体満たしたまま  
自然に抱き合い 眠れるから  
その中の 一番上等なシルクの  
真っ白なベットに 僕はあなたを連れて  
春の日曜の 休らいのひとつきを  
いつまでも 憩っていたかった

## 雨上がり

街に突然 雨をもたらした黒雲は  
君の髪を濡らし 僕の眼鏡の縁を濡らし  
どこへ走り去ったのだろう  
悪戯な子供の 脚のような無計画さ  
あるいは悩み無き 無邪気さに

すっかりと 泣いていた空も  
喉もとの熱さ忘れて  
澄んだ青さを 潤ませる  
明るさ強くする 新鮮な夏の光りが  
黒い地面を まばゆいばかりの  
水銀の水溜りにする

雨宿りにと 走りこんだ見知らぬ公園  
小さな木陰の繁みは 穴だらけの雨傘  
濡れてしまった 肩の冷たさ  
乾かしながら 小さな虹が  
やがて空 渡っているのを  
最初に見つけたのは 君

僕の夏服の袖を引き 空を見上げた  
その瞳には 七色のプリズムの光り  
きっと 溢れだしていたに違いない

(あれは ありふれた午後の  
ゆっくりとした僕らの 歩みのよう  
何も思わず 穏やかに空を渡って行く  
口元からこぼれる 楽しい歌の小節が  
綺麗な色の航路 曳きずっていくように)

芝生の上にも 水銀のしずくの銀の粒  
湿った空気 胸一杯に僕は吸い込んで  
まだ七色の印象に 透き通ったままの  
美しいあなたの背中に  
小さな一歩を歩き出す  
手のひらを当てる

あなたの心に届いた  
きれいな夏のかげらを  
壊さないように そっと

穏やかな思い

さっきまでは あんな楽しげに  
騒いでいた 子供たちの声も  
静かな海のように 凪いだ  
潮風のような どこかまとわりつく風に  
うながされて 見上げる空を  
溺れるように 鳥の群れが急いで渡る

毎日の見なれた 帰り道なのに  
羽根をたたき飛ぶ あの鳥のように  
どこか 淡い寂しさに  
僕も あわててしまうから  
少しでも足を早めて 帰ろう  
きっと僕を待つ あなたのいる部屋へ

一走りながら帰る 子供たちの背中  
見守る夕日は 穏やかな金の瞳  
木立の一葉にも 宿る慈愛は  
一日の終わりを 静かに肯って

誰もいなくなる公園のベンチ  
赤い風の揺らすブランコ  
マンションの窓辺には また一つ  
柔らかな明りが 道しるべのように点った

その軒先の 一つには  
小さく実った ブドウの一房  
西日に鈍く 黒く光って  
静かに赤い 風に揺られて

その一粒よりも かすかな甘さと酸味が  
僕の舌に残る 一日のかたみ  
跡形も無く 棚引いては消える  
茜色の雲よりも はかなげな  
顔には赤い 残照の火照り  
まだひりひりとする  
胸の片隅には 後悔の火照り

家が近づくにつれて  
風は あなたの面影にあふれて  
あなたとの会話を 僕は考えてみたり  
少しおかしくなって 微笑んでみたり  
柔らかな舌のように 癒される僕は  
今日を穏やかに 胸にしまいこむ

そんな一日が あったことさえ  
忘れられてしまう  
ありふれた日々の 終わりごと  
深まっていくのは  
穏やかなだけの あなたへの思い

夕映えに

今日かわした 何気ない言葉の  
いくつがあなたの 夕暮れていく胸に  
流れたのだろう どんな音を立て

あなたは今日も 楽しくいられたらうか  
あなたは僕に 笑いかけるけど  
僕はどこか 自信がなくて  
少しすねた 子供を真似るように

買い物帰り 小さな荷物を手にさげたまま  
重たげに流れる 都会の赤い川に石を投げ  
小さな水しぶきのあげる 音を聞いている  
水面には 下流にひっぱられ  
今にも千切れそうに のびる柳の影

今日も足早に 終わってしまう一日の  
とりとめもない言葉を 胸の内から  
焼き尽くして 黙らせる夕刻  
なにか寂しく笑うことしか できなくなる僕を  
通りすがりの自転車に 追い越されながら  
待っている あなたの側へ

一きらめく夕日が炎を点す 空一杯は  
酔いしれたような 紅の墓標  
すべてが淡い語り口の  
はかなく 消えそうな物語のように  
不確かに 輪郭燃やす街に  
置き去られて眠る  
少し苦笑いした 今日の形見



つかみどころのない 愛惜に満ちる胸は  
結んだ あなたの手のひらに鎮められ  
一步 赤い道の先へ踏み出そうと  
忍び寄る闇に 姿奪われる夜には  
その手のひらの 温もりを頼りに

僕はあなたと 一緒にいたいから  
寄り添う心のままに どこまでも

眠りに落ちる前に

気づいているかい  
今どこか寂しい風が  
窓辺を叩いて過ぎたこと  
窓の外では黒いつむじ風が  
恐る恐るカーテンを開く  
僕を脅かそうと待っているから

気づいているかい  
笑った僕の顔の下には  
たくさんの悲しい風景がいつでも  
瞳の下で放心していること

もう見たくもない一杯のものから  
胸の内を守ろうと 僕が壊れないようにと  
瞳つむって酩酊にまかせる  
それはきっと こっけいなこと  
世界は明るさに溢れていると  
知っているはずなのに

けれど 夢さえもが眠りに僕を脅かす  
どこか渴いた 寂しい映像が  
残酷な繰り替えしとノイズで 僕を苦しませるから

僕はまたものうげに あなたを見上げる  
あなたの瞳は優しい色にあふれて  
僕の姿を映しとってくれるから  
あなたの面影一杯に僕を満たして  
眠りの中に落ちていきたいと

それがまた朝のけだるい陽射しにも  
僕を呼び起こしてくれるから  
あなたに会いたいことが  
僕を目覚めさせるから

あなたの微笑みに抱かれて  
もう少しこのまま  
唇や頬の輪郭を なぞらせてゆっくりと  
一人の眠りにも その柔らかな曲線  
忘れないように  
僕を受け止めてくれる 眼差しの  
色合いの強さと深さ  
何よりも深く 胸に刻み込むから

気づいているかい  
悲しみが深まるにつれて  
どれだけあなたが僕に  
大切になっていくかを

### 豊潤な夜

二人がけのソファーに 体深く沈めて  
匂いたつワインの 赤いグラス  
透明な音をたて傾ける 夜は豊潤に  
はなやぐ会話と あなたの微笑みの内に  
静かに 深まっていく  
時計はやがて 時の刻み方を忘れて

楽しげな あなたの目元  
柔らかな笑い声に 一杯の頬は  
僕の口づけを引きつけてやまない  
惜しむことなく 僕の重さ呼ぶ  
透明な重力のように

軽い口当たりの 菓子細工のような  
あなたの横顔を すりぬけて  
どこまでも 優しい感触に重なろうと  
そうあることが 昔からの決め事のように  
とても 自然な気持ちのまま

深みゆく夜の 暗がりの水面に  
ただ一つだけ浮かぶ部屋は  
華やいだゴンドラのように  
三日月の船酔いに 快く  
揺られたままの 僕らの長い夜は

ありふれた時間からは放たれて  
流れていく 遠い野原をめぐり  
幾千もの星や 月の光に満ちた  
歌いやまない 調べのような高ぶりに

やがて 豊かな夜を  
胸一杯に吸い込んだ 軽い手足のほてり  
白いシーツが 快く濡れさせ  
夢の岸辺へと 運び去り

羽毛を捲き散らしたような  
朝の諸手の光りが  
あなたの柔らかな体 壊さないように  
そっと 抱きとるまで

## 夢の中の人に

最後まで点っていた  
本を読むための 枕もとの明かり  
一息に吹き消すように  
あなたが「おやすみ」を告げると  
それが僕の 一日の終わりの合図

今しがたページを閉じた  
本は 語ることを止め  
頭の中に 余韻を残す  
テレビのニュースも  
すでに遠い出来事

もう 今日の悪あがきは止めた  
静かになる部屋 目をつむる僕の体に  
覆い被さる暗闇は 僕の手足の心地よい重さ  
穏やかな眠りに 僕を手繰りよせる

夏の夜 開け放たれた窓からは  
真昼の体温に 火照ったままの暑い風  
車の クラクション  
まだ働いている 電車の軋み  
遊び足りない うかれた人の  
耳ざわりな 独り言を乗せた

いつも 眠りにつくまでに  
少し時間のかかる 僕の耳には  
もうすっかりと 夢の中の住人となった  
すこやかな あなたの寝息だけが  
どこか懐かしい 星空の音信のように

いつでも 手につかめそうな高さに  
けれど手を伸ばせば  
届かない深みに 遠くままたいている  
静かな 夜の捧げもの

僕が暗闇に 心安らかにいられるのは  
あなたがそんな 方位磁石のように  
僕の居場所を 夜空に教えてくれるから と  
たわいもないことを 考えているうち  
耳ざわりな音も まどろみにとけて

明日の朝も あなたの傍らで  
目覚めることの どんなにか  
僕はうれしくなれるだろう と  
楽しい夢に微笑む あなたの耳元  
そっと ささやいてから眠る

朝に

まどろみのもとから 僕を抱き起こすのは  
窓辺に差し寄せ 部屋中の影に  
手を伸ばそうとする 光の触手  
鉢植えの小さな サボテンの刺  
一つ一つにも こぼれて

夕べ遅かった 朝はまだ眠るあなたの  
白い肌を柔らかな 輪郭で写し取り  
木琴に見立てた 長いまつげで  
真珠色の音階を 奏でている  
—その音色の透き通った楽しさ

ベランダには 朝の使者の小鳥の声  
ペパーミントのような その調子にも  
目覚める気配の無い あなたの横顔は  
深い眠りに 魔法をかけられたままで

静かな吐息に かすかにふくらむ肩  
こぼれ落ちた毛布を かけ直し  
朝日に濡れた髪 そっとかきあげてみた

いつしか 僕の瞳に重なったあなたの瞳  
自然なままに 僕はその窓から訪れる  
蜂蜜色の風や若葉色の風景を 顔一杯に受けて

毎日のかたわらの耳の奥  
金色の果実のように 揺れる声の調子に  
世界は調音されて 厚い音色に響きだす

たとえば 薔薇の花の赤の深みについて  
歌に溢れた小鳥の舌の祝福  
終り行く夕暮れの風の 穏やかな口付け  
深みゆく夜の 心鎮める音楽  
ありふれた午後の散歩  
土を踏む一足ごとの 会話の楽しさ  
僕を感じとれなかったところの  
いくつもの秘密の扉を 無尽蔵な鍵で  
あなたは 開いて

今日も繰り返す あなたとの対話の  
あなたが与えてくれる糧を  
毎日の栄養に 僕は地上に繋がれる

ともすれば 黙りがちな心に  
頬張らせる 七色の飴玉  
咳き込みがちな 詩の言葉も  
甘めく喉の奥からは  
自然にあふれ出そうと 汗ばんで

軽い寝返りを打つ あなたの顔に  
微笑みを浮かべる 素敵な夢が  
今日一日の 僕の糧になるように

あなたを起こさないよう 僕は静かに  
騒ぎだす街の 冷たいドアのノブに  
少し火照り始めた 右手を掛ける

## 春の歌

今日も何気なく あなたと  
一緒に過ごせた 一日に  
いつものようにあなたが 笑っていられたこと  
ふざけあう言葉が どこか楽しくて

「ほら、あそこの鉢植えには  
誰かさんのように眠たそうな  
だらしのないスマレ」  
「いつも寝ぼけている人には  
言われたくない、そんな言葉」

すっきりと 軽い陽射しに 装った街の  
笑った春の口もとには 無造作に花が活けられている

「この甘い香りはつつじの香りかしら」  
「そうじゃないかな  
ミルク色のつつじなんかはお菓子のようで  
一口につまんで食べられそうだね」

そんな会話を 伝えて渡る南風に  
若葉がクスクスと笑っている  
とまどっているのは そんなたくさんの笑い声で  
重たく揺れている 梢たち

「ねえ梢に残る 散り遅れた桜は  
花占いのようだと思わない  
一秒ごとに花びらを散らして」  
「身を散らすほどに 誰かを好きな恋占いかな」

—そんな風には 僕の思いは激しくはないけれど

あなたと並んで歩く風景が  
あたりまえのものに 僕にはなって  
毎日通る いつもの道も  
一足ごとの あなたの会話に  
忘れられない風景として  
胸に 描かれていくから

知っているかい  
雨上がりの朝の さわやかな風  
青い空を映した 水たまり  
若葉も眠る 日溜りの午後  
遠いところの 大火事のような夕焼け  
この春の出来事の 一つ一つが  
あなたの瞳に拾われて  
僕の胸に 静かに積み上がっていること

「花壇舞うミツバチは、迷い箸のようだね  
あんなに花が一杯だと、やっぱり迷うよね」  
「浮気性だからじゃない」

「きっと僕らの鉢植えの蕾も  
もうすぐ白い花を咲かせるかもね」  
「花の名前さえ知らないくせに」

一少し意地悪なあなたから  
新しい花の名前を 僕はまた胸に刻み込む

足元に転がってきた 白いボールを  
小さなグローブの子供に  
投げ返す青空には  
あなたに吹く さわやかな風

そんな風に 手をひかれるがまま  
訪れる毎日に身をゆだねて 暮らしていくこと  
あなたとの時間に 肩の力を抜いて



「今日の夜は 何を食べようか」

ほんとうは 何でもいいのだけれど  
あなたとの会話で 飲み込む  
食事であるのならば

毎日の音色に

幸せな南風が 鈴蘭の白い鐘  
高い音色で 響かせるように

光の言葉で 梢一杯の櫂が  
木漏れ日の子供たち 走り笑わせるように

あなたに誘われ 素直な調べをつむぐ  
魔術にかけられた 僕は一本の弦のよう  
生と死の 強い緊張の上に張られた  
葡萄のような 豊かさから歌いだす

新鮮な蜜蜂の羽音  
紫のすみれを いっせいに振り向かせるように

紋白蝶の 楽しい踊り  
菜の花畑を 波打たせるように

どんな 上手な歌い手よりも  
僕を響かせる  
あなたの調子にあわせ  
高らかに奏でる 毎日の音色

何気ない あなたの言葉 仕草にさえ  
おかしなほどに 高鳴る胸には  
虹色の音符が 喜び勇んで  
五線譜に 収まりきらないほどだから

静けさを揺りかえす 波の細やかな手  
銀色の海原を 静謐に満たすように

夕映えが 子守唄のかけら  
懐かしく胸に 呼び起こすように

数多の星屑の光 夜の帳が  
余すことなく 優しく吊り上げるように

きっと僕らは  
一つの楽器に張られた  
二本の弦のように  
お互いの響きに震え  
それとも気づかず  
楽しくなり続ける

水色の小川のせせらぎと  
微風の子供との 戯れほどにも

萌黄の若葉を笑わせる  
陽射しのヒソヒソ話ほどにも  
疲れを知らない ね

## 写真に

一枚の 写真の上のあなたは  
異国の 強い夏の陽射しに  
目を細めている 麦わら帽子を深く被って  
笑っている まぶしそうにこげた顔  
僕の見知らぬ 色彩豊かな寺院の前に立って  
小さく手を振る あなたにつられて  
僕も思わず 微笑んでしまうから

そのときの あなたの胸には  
どんな調べが 流れていたのだろう  
あなたを豊かに育てくれた  
華やかな色彩 鮮やかな陰影  
異国の人 の 肌の色合い  
暮らしの中に 立ち込める匂い

僕がそのとき あなたのそばにいられたならば  
あなたはどんな言葉を 僕にくれたのだろう と  
写真のあなたと話せない僕は どこかもどかしいままに

けれど 知っている  
あなたが体のためこんだ だくさんの風景は  
深い色合いのとけこんだ 始めの海のような  
栄養豊かに あなたを育むゆりかご

あなたの口元に ときどきキラキラと  
そんな風景が 呼び立てられて 姿を変えて  
産まれたての天使のように  
まぶし過ぎるばかりだから

僕はひかれ続けて やまないんだ  
今度はどんな甘い蜜 こぼれてくるかって  
ミツバチやアゲハチョウのように  
僕を毎日 豊かに甘くしてくれる ね

## 夏の避暑地で

今 藤椅子に座って  
うたた寝をしていた 涼しい高原の風が  
僕らの石を踏む音に 気がついて  
いそいで森に 帰っていったから  
誰もいない ベランダの藤椅子が  
あんなにも揺れているのだと話す  
僕の言葉を信じない あなたは軽く笑い  
その様子につられて 空の水面を  
すまして泳ぐ 夏のとんぼたち

あなたと遊びに来た 緑の避暑地は  
蝉の声さえどこかさわやかに  
耳の裏側にさえ 風の語り口が  
ミントのように 涼しい  
小さなロッジの外に広がる  
白樺はきつと そんな涼風が  
森をかきわけた 爪のあと

いつの間にか 風から藤椅子を奪った  
あなたは体を深く沈めて 目をつむる  
夢見る子供の あどけない微笑を浮かべ

それはあなたの頬を 影絵で遊ぶ  
木漏れ日が あなたのまぶた  
宝石のように透明に 重たくするから

あなたが 気づかないうち  
重なった山並みの上には 真っ白な雲が高く峰をなし  
力の限りに真っ青な空が 森一杯を明るませている  
酔いしれるような 夏の陽射し 肌の上を波たつ風  
光りの川を泳いで行った 魚の背中 虹の色  
花にもぐりこんで消えたのは ミツバチの小さな羽音  
公園で遊んだ 年寄りのシーソーの語り口は楽しくて

そんな一瞬ごとの印象は  
あなたの心に 僕がしのばせる  
森の香り満たした 香水の小瓶

いつか遥かなる 夏の日  
今日に似た 陽射しの優しさに  
あなたが 明るい頭の片隅から取り出して  
胸の奥にたらしめてみる香り  
胸に広がる緑の涼しさ  
甘い木の実の香りを かすかに含んで と

あなたは まだ目を閉じたまま  
黒い髪で 高原の風を遊ばせている  
そのたくさんの風の手が  
澄んだ水面の 銀色の鍵盤のように  
あなたを輝かせて まぶしいばかりだから

あなたの眠りに どこか青ざめた夏の影が  
入りこまないようにと 少し緊張しながら  
僕のささやかで楽しい 悪戯の行方  
のどかな雲を見ながら 考えている

## 港の公園

港には夕暮れとともに 凧いだ潮風が  
どこか重たく 君の髪にまとわりついているね  
テトラポットに 噛み付いていた波さえ  
今日の仕事に もう飽いたみたいに 億劫だ。

宝石のように輝く子供たちを でたらめに散りばめていた  
この港の公園にも マッチのような夕刻が点って  
人影がめっきり 少なくなったよ  
帰れのサインを いつの間にか電燈が発したからさ。

そういえば 春風が欲しがって  
奪い去った青い風船は どこへいったろう  
もう空の一部として 溶けこんで消化されたのだろうか  
それとも 銀河の果てをめざしてまだ  
あてのない旅を 続けているのだろうか  
いずれにしろ 子供はキョトンとして  
それから 手のひらをみつめ泣いていたっけ。

少し歩きつかれたからと 小さなベンチに座ると  
ペンキが剥げ落ちていたね どこか感じてしまう  
移り変わるものの 留まれない寂しさ  
僕の細い神経の束を 突然につかまれた気がして  
胸の奥が 青白い刃物のように鈍く光った  
僕の目は かもめのように  
細く鋭く 見ていられなかったかい。

ゆっくりと動く水面は どこかもどかしいほど  
海はいつでも はるかな気持ちを与えてくれるから  
それはきっと 海の前にたたずんだ  
数え切れない人の記憶が ミルクのように濃厚に  
海の一滴ごとに 溶け込んでいるからさ  
僕らに渡される 記憶は大きすぎて  
呆然と見ているしか 手がないんだ。  
—それで海は一層 記憶のスープを濃厚にするんだ

海の風や太陽と戯れる 遊びに比べたら  
あまりにも短く 急ぎすぎる僕らの生き  
あなたと一体 あとどれぐらいの時間を  
一緒に過ごせるのだろう  
こんな港の公園を訪ねて 初夏の風に  
衣を 引かれるがままに。

港にはどこからか流れてきた 客船が漂流している  
その船首には 読めない外国の文字がにじんでいるね  
僕の涙のせいかな 僕の瞳は弱いから  
すぐに目に映る物事が かすれていくんだ。

汽笛が大きく 一つ響いて  
きっとどこかに 旅立つ船がいるのだろう  
無事にその航路を 終えてくれればいいね  
時折は 灯台に導かれてもいいから と  
そんなことを考えていたら いつの間にかあなたの顔が  
夜の影に埋もれて 少し見にくくなったよ  
それでどこか 慌てる自分を隠そうとして  
言葉さえも もどかしくなり  
僕は 寂しくなっていたんだ。

### 晩夏の公園

噴水は 涼しい光の花束を咲かせた  
咲いては弾ける 白いかすみ草を  
何度も空に差し出そうとする あきらめの悪い手

その花びらを ついばもうとする  
途方も無い企てに あわてて  
鳩の群れが いっせいに羽をうち鳴らしている

空は そんな鳩さえ とまどうほどに澄み渡って  
泳ぎ着けない 岸辺の無い水際のように  
その中に染まるものは 骨の髄さえ残さずに  
青さに 姿を失うと

噴水の流れには そばかすまみれの気の早い落ち葉  
その上にとまろうと とまどっているのは  
遊び足りない 真っ赤なとんぼ  
きっと照り返しが激しくて 複眼の目が見えないから  
夏が太陽の陽射しで 型どった透明な羽も  
季節の境目に力をなくして  
破れ墜落して行く 紙飛行機のように

どこにも 行くところなくした夏が  
最後の祝祭にと 集まってくる  
季節のすれ違う 晩夏の公園に  
一人足を踏み入れて 交錯する思いに  
引き裂かれる僕を

去り難い夏は 誰もいないブランコに揺れて  
銀色の滑り台を 急いで何度でも滑る  
過ぎ去る時間を 一秒でも惜しむかのように

木立は そんな夏にはもう無関心に  
年輪のため息 深まる独り言  
そうして 秋の身づくろいとで精一杯だから

秋に誘われる 僕の体も透き通り  
あらわになる夏の血潮 脈打たせる血管に  
あなたのいない寂しさが  
紛れ込み 騒ぎだすから

空を舞う鳩よりも とまどい  
噴水に遊ばれる 落ち葉よりもあわてて  
あなたの白い肌に 触れていたくなる  
優しい声に 胸を満たしたくなる  
体中から抜けきらない 寂しさを鎮めて

僕の心が 季節のままの正しい調子  
すっきりと 取り戻せるように  
あなたの強くて暖かい瞳に  
心から つつまれていたくなる



## 冬の思い

いつからか 降り始めた雪に  
街は粉砂糖にまみれた 菓子の甘さを漂わせている  
点々とかすむ街灯は 今日生まれた誰かの  
誕生日 その蝋燭の名残のようだ

ストーブの前の椅子 ひざに赤い毛布をかけて  
あなたは眠っていたね いつの間にか  
雪のその後の 様子など知らず  
さっきまではあんなに はしゃいでいたのに

今では 窓の外 透明な鈴鳴らすぼたん雪  
幼いときに見た 夢の続きのような  
声無き 影絵の始まり  
真っ白な 一夜限りの広い舞台のおとぎ話。

雲の奥底に湧き上がる どんな切実な祈りとともに  
空埋め尽くす雪は 生まれてくるのだろう  
分け与えられた 小さな祈りの言葉を  
結晶の一番美しい 心臓に添えて  
空からの長い長い旅路を 巡礼者のような  
真面目な面持ちをして

そんな空からの  
祈りの言葉に満ちる 大地は静かに  
一心なままの雪の様子  
猫さえもが耳を立て 白い息をこらえているから  
屋根や塀は 空からの贈り物  
背丈を小さく 壊さないようにと受け止めて

時折は この部屋の灯りに誘われるのか  
窓辺に顔寄せては 透明なガラスの暖かさに  
とけていく せつなさ  
まじわれない せつなさ  
一おまえは僕に どんな言葉を捧げに来たのだろう

届かない言葉は やがて空に帰るばかりで  
きっと明日の朝日には すべてが昇華されて  
大地からは消えている 遠い夢物語のように

雪よりもかすかな 吐息を吐いて  
まどろみに憩う あなたの頭に  
僕はそっと 頬を寄せてみる  
溶けることなく 温もり伝わるあなたに  
さわれることの うれしさ  
きえてしまわない たしかさ

僕の胸に湧く言葉を  
この雪のように きれいな結晶に磨いて  
毎日のあなたの胸に届けたいと  
雪のささやきを真似る夜  
静かに 窓の外に 耳を澄ませていた

#### 桜色の小舟

春の高鳴りを 告げる小川に  
春風が懐に隠し 空高くからまく  
桜の花びらが 光りとともに滑っていく

初めての 温む水に触れ  
うれしさに頬 赤らめる桜色の小舟  
小さな人が 一枚一枚の上  
手馴れた櫂を操るように  
お互いが ぶつかりあうこともなく  
水底に飲まれることもなく  
時々 小さな渦に目を回している

桜色の小舟には  
めまぐるしく流れる 白い雲  
柔らかなままの青空  
たくさんの言葉伝える 銀色の風  
追いかけてくる 金色の魚影  
移り変わる風景には 息を呑んだまま  
一つに 心とどめられない  
空を分かっ 飛行機雲にさえ 夢を見るように

そんな川面の 桜色の小舟にも似て  
浅い春の陽射しに  
まぶしそうに目を細めて笑う  
あなたの目まぐるしい 笑顔や仕草は  
光を弾く 豊かな流れのように  
僕の心は こともなげに流されて  
息つく暇もなく 言葉さえどこか  
春風に遊ばれて 上ずったままに

一さっきあなたが 軽やかな指先で  
鳴らしたずずらの音色が  
暖かい春を呼ぶ 合図のように  
僕の耳にまだ 楽しく鳴り響いている

早く桜色の 船酔いから覚めて  
岸辺をゆっくり  
あなたと肩を並べ 歩きたいと  
けれど 高鳴ったままの胸の内  
落ち着けるすべを 知らないでいる僕は

桜色の小舟  
いつまでもあなたに  
夢見心地の

潮風に歩いた日

衣服を遊ぶ

いたずらげな潮風は  
あなたのまわりに

高いところ

空に溶け出す水平線は  
白い鷗を滑り落として

まだあどけない

春の光りはその翼に  
一羽、二羽と  
降りて明るむ . . . . .

なだらかな一本の道を

通ってたどりついた  
切り立つ岬

下から吹き上げる風と

背中から押してくる風に  
足元が奪われそうに

呼吸を失ったような瞬間の

真近に浮かぶ  
雲の白さが印象的だった . . . . .

岩肌をたたく

波の音は耳に大きく

あなたは

下を覗いていた  
僕の手をとり  
おそるおそるに

あなたの白い襟元  
金色の鎖が  
僕の瞳には輝いていた・・・・・・・・

あなたの声に呼ばれて  
歩いて行く  
岬の先には  
空へと伸びる古い灯台

そのまわりを取り囲む  
草地には背の低い  
春の花が群れて

つややかな緑の皿  
太陽に盛った薄い紫・・・・・・・・

潮風に吹かれる  
その草花は踏まないように  
近づいてゆく灯台の先には  
白い客船が銀色の海原を漂い

あんな船に乗り  
僕らもどこかの  
きっと遠くへと  
伝えようとする

あなたは指先から  
空の青さに  
溶け込んでしまいそうな気がして

その細い肩の感触を  
僕は手のひらに  
しっかりとつかんでいた・・・・・・・・

あなたは不思議そうに  
僕を見て微笑み  
僕はうっすらと  
口元をゆるめる  
微笑みを返して

あなたの横顔を  
照らす日差しからは  
影になる頬へと  
そっと唇を押しあてた。

めぐり逢う日に

僕らのために 用意されている  
はるかで 優しい巡り合いの中で  
逢いまみえるだろう 何度でも僕らは  
太初の契りのままに お互いの調べを必要として  
いく千もの生に すぐかわる顔にも  
記憶の底に刻まれた 愛しい面影に引かれて

当たり前のことのように 手を取りあって  
温もりを分かち合い 語りだすだろう僕らは  
千日の夜の豊かさよりも 心に満ちる時間  
何よりも確かな予言のように あなたの瞳を信じて

ふれあう心は弾けあう 指と弦との調べにも似て  
高まるだろう 一つの音色として  
星屑をたたえた夜空 銀色の露に濡れた  
遠い野原の 無垢なる静けさへと向け

数しれない瞳を起こす 太陽はいく億もの朝を巡り  
胸の奥から新しい日の心 駆り立てて  
汗をかき 歯をかみしめる大地の労働に  
きしむ背骨のあげる 日々の生活の悲鳴は  
夕日に燃やされて 声にならない無念さを  
宵闇の皺に 深く刻み込んで

闇に高まる抱擁のほてりを 寂しく鎮める夜の風  
青白い亡骸を立たせる 月光の時間は  
那由多もの小さな 夢の涙に濡れ

僕らを一人 長い物思いに放り出す夜は  
饒舌な舌の貪欲な言い訳を 漆黒の闇に塗り込める  
積み重なる追憶の記憶は 夜空に散らばる星屑よりも  
孤独な空間に その音信を失い

黙したままの 高い空の調べ  
青い郷愁に呼ばれ続けて 終わることなき彷徨の先に  
目線を上げながらめぐり逢う あなたに  
いく千ものざわめきから 一つだけ胸の奥に湧き上がる  
せせらぎのような 透き通った言葉の源をたどり

僕は歩いてゆく  
一步一步 重くなる歩調  
永遠の問いの 生きてあることの痛み  
自分の心臓の鼓動と 重ね合わせながら

あなたの耳もとにささやく 智恵深い言葉  
心の花かご一杯に つむぎだすために  
悲しみと 美しさとのいばらから  
痛む両手の指先 休めることなく

やがて 金色に魂を染めて  
暖かな 初夏の風にお互いを呼ぶ  
愛しさのままの 瞳の奥の抱擁に  
微笑み分かち合う めぐり逢う日のために